歌とピアノでつづる愛の詩

美しい季節に

2017年5月14日（日）15：30開演

ミューザ川崎　音楽工房　市民交流室

後援

フェリス女学院大学音楽学部同窓会Fグループ

ごあいさつ

本日はご来場賜りまして、まことにありがとうございます。

フェリス女学院という同じ学び舎で、学生時代を過ごした私たち。
学生時代、いろいろな国の作品を学ぶ機会を得ました。
憧れを抱いて学んだ数々の作品が生まれたヨーロッパで、
一番美しいとされる５月。
良き師、良き友に恵まれ音楽を学んだ横浜山手の丘も、
この季節は新緑が芽吹き、花が咲き、
新しい生命に満ち溢れた“ 美しい季節 ”です。

歌とピアノでつづる愛の詩“ 美しい季節に ”

この午後のひととき。
生き生きとした春を感じていただき、この美しい季節が、
より鮮やかな彩りで眼と心を満たす一助となりますように…！

海野美栄（ソプラノ）
森永美穂（ソプラノ）
尾藤万希子（ピアノ）

プログラム

G.F. ヘンデル
『イタリア語の二重唱集』より
「信じたくない、お前たちなんて」HWV189 （作詩者不詳） ♥♣♦

中田喜直 / 別宮貞雄
さくら横ちょう （加藤周一） ♥♣♦

山田耕筰
からたちの花 （北原白秋） ♥♦

小林秀雄
演奏会用アリア「すてきな春に」（峯陽）　♣♦

平井康三郎
うぬぼれ鏡　（小黒恵子）　♥♦

R. シュトラウス
『ブレンターノの詩による 6 つの歌 Op.68』より
2. 私は花束を編みたかった　(C. ブレンターノ)
『8 つの歌 Op.10』より
8. 万霊節　(H.v. ギルム)　♣♦

F. リスト
おお、愛してください、愛しうる限り S.298　(F. フライリヒラート)　♥♦

休憩

L. ドリーブ
歌劇《ラクメ》より「花の二重唱」　(E. ゴンディネ、P. ジル)　♥♣♦

G. プッチーニ
歌劇《ラ・ボエーム》より「私の名前はミミ」　(G. ジャコーザ、L. イッリカ)　♣♦
歌劇《トゥーランドット》より
「お聞きください、王子様」～「氷のような姫君の心も」　(C. ゴッツィ)　♥♦

P. マスカーニ
歌劇《カヴァレリア・ルスティカーナ》より「間奏曲」　♦

R. シュトラウス
歌劇《ばらの騎士》より「ばらの献呈の二重唱」　(H.v. ホフマンスタール)　♥♣♦

♥…海野美栄　♣…森永美穂　♦…尾藤万希子

プロフィール

Mie Umino

海野 美栄

ソプラノ

フェリス女学院大学音楽学部声楽科を三宅賞をもって卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。大学院在学中に神奈川フィルハーモニー管弦楽団と共演。読売新人演奏会に出演。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。二期会公演ブリテン「真夏の夜の夢」でオペラデビュー後、コンサートやオペラに出演。2014 年、イタリアにてプッチーニ「ラ・ボエーム」にムゼッタ役で出演した。度々訪米し、ニューヨークにて Diane Elias、Ruth Falcon、David Holkboer 各氏のもと研鑽を積む。友愛ドイツ歌曲コンクール入選。現在、二期会および東京室内歌劇場各会員。明治大学リバティアカデミー講師。新潟市ジュニア合唱団指揮者。

Miho Morinaga

森永 美穂

ソプラノ

フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。大学院在学中に神奈川フィルハーモニー管弦楽団と共演。横浜市新人演奏会出演。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。東京オペラシンガーズの一員として東京フィルハーモニー管弦楽団他様々なオーケストラの定期公演、オペラに参加。リトミック研究センター養成校ディプロマ B 修了。歌とリトミックを融合した参加型コンサートを企画、提供する団体 “ShuShuMusic” を立ち上げ、定期的に公演を行っている。これまでに声楽を、芳野靖夫、田中奈美子、大島幾雄、渡邊明の各氏に師事。現在、戸塚こばと幼稚園リトミック教室講師、二期会会員。

Makiko Bito

尾藤 万希子

ピアノ

京都市立堀川高等学校音楽科卒業。フェリス女学院大学音楽学部ピアノ科を経て、同大学院音楽研究科修士課程および研究生修了。大学院在学中より音楽学部講座副手を務める。2008 年に渡仏し、パリ国際芸術都市 (Cité Internationale des Arts) に滞在、研鑽を積む。帰国後は、主に声楽の伴奏ピアニストとして活動している。これまでに、ピアノを藤田鈴、和子・ザイラー、エルンスト・ザイラー、馬場和世、高良芳枝、畠山さち子、堀由紀子、ジャン＝マリー・コテ、伴奏法を立神粧子、ジャン＝ミッシェル・ルシャールの各氏に師事。日本フォーレ協会、フランス歌曲研究会、二期会フランス歌曲研究会各会員。

曲目解説

・『イタリア語の二重唱集』より
「信じたくない、お前たちなんて」HWV189

1741年に作曲された、ソプラノのための二重唱曲。「信じたくない、お前たちなんて。盲目の愛の神よ。酷く、美しい人よ！」と、愛する者の苦悩を歌う。3つの楽章からなり、いくつかのテーマは、直後に作曲されたオラトリオ『メサイア』にも用いられている。

・さくら横ちょう

遠い日の淡い恋心をつづった加藤周一の詩に、1950年に中田喜直、1951年に別宮貞雄がそれぞれ曲をつけた。通り過ぎた恋の儚さを「軽くさらりと」美しく歌わせる前者と、語り手の心の動きを音楽の変化にのせてドラマティックに歌わせる後者。表現の方法は異なるが、どちらも日本的な情緒と美にあふれた名作となっている。

・からたちの花

数ある北原白秋の詩による山田耕筰の歌曲の中でも特に愛され、演奏される機会の多い「からたちの花」。ここで歌われているのは、幼い頃の耕筰自身の姿である。工場で働かなくてはならなかった子供時代、耕筰をなぐさめたのは、敷地の一隅にある、からたちの垣根だった。白い花、青い棘、金色に実る果実。そこで涙する耕筰を包み込むもの。遠い日の思い出と自分自身の姿をあたたかく見つめる、優しさに満ちた作品。

・演奏会用アリア「すてきな春に」

「演奏会用アリア」と銘打たれたこの作品は、その名の通りとても劇的で華々しく、伴奏もオーケストラを思わせるようなスケールの大きさを持つ。レチタティーヴォ(朗誦)とアリアからなり、レチタティーヴォでは恋の目覚めやうろたえ、ときめきを語り、アリアでは、春の描写とともに恋のよろこびを歌い上げる。1972年4月に作曲、夫人のリサイタルにおいて初演され、その際のピアノは作曲者自身がつとめた。

・うぬぼれ鏡

「スキー」「ゆりかご」といったお馴染みの歌から、歌曲集『日本の笛』など芸術的な歌曲まで、様々な名曲を残した平井康三郎の作品。詩は、「おかあさんといっしょ」や「みんなのうた」などの楽曲を数多く手がけた作詞家・小黒恵子による。ウィンナ・ワルツ風の音楽にのせて、中年の女心を面白く描いた素敵な作品。

・私は花束を編みたかった

この歌の詩は、ブレンターノの喜劇『ポンス・ド・レオン』に含まれているもの。ゲーテの「野ばら」にも近い質感を持っている。「私があなたの為に花束を編もうとしていたら、夜が来て花を摘めなかった。私の涙がクローバーに落ちると小さな花が咲いたが、“まだ若い私を死なせないで！”と言ったので、摘めない。あの人は来てくれない。愛には悲しみがつきものなのかしら？」

・万霊節

『8つの歌』作品10はR.シュトラウスの歌曲の第一作目にあたる。終曲「万霊節」は最も清らかな愛に満ちた傑作。「テーブルにもくせいを、赤いアスターを添えよう。そして、愛を語ろう。かつて五月にそうしたように。手を僕に握らせて、お前の眼差しを僕に注いでおくれ。かつて五月にそうしたように。今日は死者たちの一年に一度の日だ。僕の胸にきておくれ。かつて五月にそうしたように。」

・おお、愛してください、愛しうる限り

ピアノ曲のイメージが強いリストであるが、歌曲も多く作曲しており、そのメロディの美しさは格別。かの有名なピアノ曲「愛の夢 第3番」は、実はこの声楽作品が元となり生み出されたものである。「愛しなさい、愛しうる限り。愛する者の全ての時を幸福で満たすのです。そして、口を慎みなさい。悪しき言葉を言ってしまったら、愛するものはやがて悲しみとともに立ち去るであろう。」フライリヒラートによる美しい愛の詩が、甘いメロディと華麗なピアノによって情熱的に歌われる。

・歌劇『ラクメ』より「花の二重唱」

ドリーブは、『コッペリア』『シルヴィア』などのバレエ音楽で広く知られるフランス・ロマン派の作曲家。歌劇『ラクメ』も彼の代表作と言え、中でも「花の二重唱」は、その美しい旋律とハーモニーから特に愛される一曲となった。舞台はイギリス統治下のインド。清々しい朝、小舟に乗って蓮を摘みに行こうとラクメと侍女マリカは歌う。「ジャスミンとバラのドームの下、流れゆく水に乗って、花咲く岸辺に参りましょう。泉が眠り、鳥たちが歌う岸辺へ…。」

・歌劇『ラ・ボエーム』より
「私の名前はミミ」

19 世紀パリを舞台に、夢を追いかけて生きる若者たちの出会いと別れ、恋愛を生き生きと描いた青春群像劇。「私の名前はミミ」は、第一幕、詩人ロドルフォのアリア「冷たい手を」に続いて歌われるアリア。ロドルフォに促され、ミミは自らについて語り始める。「私の名前はミミ。でも、本当はルチアというの…。」お針子をしながら生計を立てるミミの身の上話を聞き、貧しくも喜びと感動を見出しながら生きるミミに、ロドルフォは心奪われる。すぐに２人は恋に落ち、一緒に暮らし始めるが、既にミミは病にかかっていた…

・歌劇『トゥーランドット』より
「お聞きください、王子様」～
「氷のような姫君の心も」

未完のまま、病に倒れたプッチーニ最後の歌劇『トゥーランドット』。終盤をアルファーノが補足して作品を完成させ、今日に至る。国を追われて放浪の旅を続けている、ダッタン国の盲目の元国王に仕える女召使のリューは、叶うことのない恋心を抱く王子カラフを守るために、命を自ら断つ。氷のような心をもつトゥーランドット姫だったが、愛のために命をかけるその姿に心を動かされる。

・歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』より
「間奏曲」

「間奏曲」とは、歌劇などの幕間や、幕の途中に挿入される小曲のこと。その中でも特に有名なのが、この『カヴァレリア・ルスティカーナ』の間奏曲である。器楽曲として単独での演奏、また、歌詞がついた声楽曲「マスカーニのアヴェ・マリア」として歌われる機会も多い。イタリアのシチリアを舞台とした、男女の裏切りや嫉妬、復讐の悲劇を描いた物語の中で「間奏曲」はひときわ美しく、祈りのような穏やかさを感じさせる音楽となっている。

・歌劇『ばらの騎士』より
「ばらの献呈の二重唱」

『ばらの騎士』は、『サロメ』『エレクトラ』に続く、劇作家ホフマンスタールとの合作。美しい場面と華やかで夢のような音楽の連続で、R. シュトラウスの作品の中で、最も愛されているオペラの一つである。

逢瀬を楽しむ元帥夫人マルシャリンと、若きオクタヴィアン。「ばらの献呈の二重唱」は、劇中で最もきらびやかな音楽と共に、ある日、婚約の印として銀のばらを贈る使者として現れたオクタヴィアンと、初々しい娘ゾフィーが一目で恋に落ちるというシーン。「こんな気持ちは今まで知らなかった…」「なんと彼女は美しいのだろう！…」

やがてオクタヴィアンとの関係と今の自分の姿に憂いを深めるマルシャリン。次第に大人びていくオクタヴィアンと、美しさを称えた若き娘ゾフィー。３人の「時の移ろい」を表す美しくも切ないシーンが続き、全てを察したマルシャリンが２人を祝福して身を引く。その後に続く恋人たちの二重唱をもって幕となる。「夢なのでしょうか…私たちが永久にいられるのは…」「あなただけを、共にあることを！あなた以外のことは全て夢のように消えていく…」

オクタヴィアンをズボン役（女性が男役をつとめる）に歌わせるというのも、特有の艶めかしさをだしている。今回は二幕「ばらの献呈」から三幕最後の「恋人の二重唱」に繋いで２人の愛を歌う。